

被爆70年の聞き取り

「“ノーモア・ヒバクシャ”を実現するために」

広島・長崎の被爆から間もなく70年を迎えようとしています。

この長い間、被爆者のみなさんはどのように生き、何を願って生きてきたのでしょうか。

この「聞き取り」は、いま人生の最終ラウンドを迎えた被爆者のみなさんの思いのたけを語っていただき、聞いた人がそれを受けとめ、次の世代につないでいこうという取り組みです。

この聞き取り票には6つの質問項目を設けてありますが、その内容は大きく分けて、被爆したときのこと、その後の人生、そして今願うこと——の3点です。すべての項目を埋めなければならない、ということはありません。話していただくきっかけとして、この項目どおり質問していくこともあるでしょうし、自然な流れで話していただいて、あてはまるところに記入していくということもあると思います。

語り手と聞き手の交流の中で、被爆者のみなさんの生きてきた証を受けとめていきましょう。

この「聞き取り」でうけとった被爆者一人ひとりの声は、2015年のNPT(核兵器不拡散条約)再検討会議に届けるなど、さまざまなステージにおいて活用し、核兵器廃絶への国際世論を高めることにも反映させたいと思います。

2013.6 日本原水爆被害者団体協議会

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

■ 基本事項 (太線の枠内にご記入ください)

記入年月日	2013年 7月 2日	整理No.	—
ふりがな 氏名	服部 道子 (はっとり みちこ)	性別	1. 男 2. <input checked="" type="radio"/> 女
生年月日	明・大 <input checked="" type="radio"/> 昭 4年 月 日 (被爆時年齢 16歳)		
現住所	〒		
被爆地	1. <input checked="" type="radio"/> 広島 2. 長崎 [町名 距離 . km]		
手帳区分	1. <input checked="" type="radio"/> 直爆 2. 入市 3. 救護 4. 胎内 5. 健康診断受診者証 [一種・二種] 6. 被爆者の子・孫 7. その他		
氏名の公表の可否	<input checked="" type="radio"/> 1. 可 2. 不可		

1. 「あの日」やその直後のことで、今でも忘れられないこと、心残りなことはどんなことですか？
とくに忘れられない光景や、それを見て感じたことを具体的にお聞かせください。

生まれは東京の広尾病院で生まれ、大森、蒲田で育った。父は戦車や兵隊を運ぶ御用船で船舶通信の仕事をしていてスマトラ沖で撃沈され、その後、広島 of 暁部隊で軍属として船舶通信の教官をしていた。戦争も激しくなり東京には一年に一回くらいしか会えない。小学校5年生のときに家族で広島 of 皆実町4丁目に家を借りて引っ越した。

広島は宇品から中国へ、大陸進出の拠点で5師団、被服廠、糧秣廠、宇品に船舶司令部など数多くの軍事施設があった。

私は比治山高女へ入学したが、2年生、3年生は挺身隊で兵器廠や糧秣廠に動員され勉強どころではなかった。兵器廠では鉄かぶとを磨いたり穴が開いたところに詰め物をしたり、先生や軍人に言われるままに作業をした。被服廠では新品はなく銃弾で穴の開いた服を繕う、汗臭く触った感じもズルズル、ゴワゴワしている。針を入れても針が折れてしまう。針を折るとお前が下手だからと怒られる。糧秣廠は缶詰を作っていた。田舎から缶詰にする牛が連れてこられる。それを工場の中に追うのが私たちの仕事だったが、殺されるのがわかるのか涙を流して鳴いて中に入ろうとしない。勉強なんかひとつもできなかった。

女学校は5年のところを戦局が厳しいからと4年で繰り上げ卒業になった。看護婦か女医さんになって兵隊さんを助けたいと思い、鉄道病院で看護科の勉強をしていた。男は兵隊にとられていないから銃後の守りは女性の仕事。列車掃除をしながら午後から看護婦になるための特訓、夜も寝ないで勉強した。(女学校と看護科は併用していた。)

看護科を昭和20年3月に卒業し、父の紹介で5月から暁部隊の軍医部で働き出した。大河にある軍の診療所のようなところ、821人の部隊だった。

8月5日は呉海軍基地が空襲されていた。8月6日の朝、警戒警報が解除になった。

母は市内の建物疎開に行くことになっていたが体調が悪く、隣の奥さんに代わってもらい家で休んでいた。母は家で新聞を顔にかけて横になっていた。私は軍医部に向かう途中で飛行機雲を見た。軍医部の朝礼が終わり、兵舎にもどる前に防火用水にボウフラがわいていたので水を替えることになり、軍曹と二人でバケツをもって水道に向かった。いきなりピカッと一面に光が来た。すぐにドン。耳、目、鼻をおさえ口を開きその場に伏せながら、やられた！最後だ！さよなら！と思った。

気を失っていたのか、起こされたときに最初にゲートルが見えた。兵隊さんだと思って、またすぐに意識を失った。もう一度声をかけられ意識が戻ったときにはすべてが変わっていた。軍曹もいない。床屋の椅子がペチャンコになって飛ばされてきて転がっている。意識が戻った時にゲートルが目に入ったのは、たぶん死んでいるのか生きているのかを確かめるために兵隊が倒れている人を蹴飛ばして歩いたのだと思う。

防空壕に避難したが入口の扉が壊れていて入れない。血だらけの兵隊が避難してくる。街を見ると火の海になっている。ようやく防空壕に入ることができたが水が上から滴ってくる。ねばねばしているのは負傷者の血。軍医部で一緒に働いていた人たちにはその後、再び会うことはなかった。

軍医部では負傷者の治療が始まった。「助けてください」「お水ください」の声。火傷に赤チン、リバノールを塗る。ドラム缶に入ったバターがあったのでそれを塗る。

焼けただけのお母さん、足の裏以外は全身火傷したお母さんが赤ちゃんを背負ってやってきた。赤ちゃんを見てもらうために必死で軍医部まで来たのだと思う。背中の中の赤ちゃんの首がない。私は思わず「赤ちゃんの首がない」と言ってしまった。お母さんはその場で倒れて亡くなってしまった。あの時、なんで言ってしまったのか。今もあのお母さんに申し訳ないという気持ちが消えない。あまりに酷くて語り部をはじめたからもしばらくは話せなかった。でも、それが戦争だということをきちんと伝えなくてはと思い話すことにした。

軍医部で一緒に働いていたお姉さんは上半身にガラスがたくさん刺さっていた。ピンセットでは抜けないのでペンチで抜いていく。抜くときに動脈を傷つけると血が噴き出す。軍医さんに声をかけても手が離せない。圧迫して止血しろと言われるだけ。

にわかテントが作られ、筵の上に火傷の人を寝かす。血と膿と汁でベトベトになる。火傷で年齢も性別もわからない。横たわっている人たちに年齢、性別、名前を聞いて荷札に書いて置いていく。「お姉ちゃん」男の子が私の足元をつかんだ。「なあに、僕。何か言いたいことがあるの。あるんだったら言いなさい。」「お姉ちゃん、日本は勝つよね。負けやしないよね。」私が「痛いだろうけど我慢して。日本は勝つ。今にお父さんかお母さんが来るよ」というと「僕、お父さんしかいないんだ。僕がここにいるのがわかるかな。」「うん、わかるよ。ちゃんと名前を書いてあるから大丈夫だよ。」そして一回りして戻ると男の子は死んでいた。忘れることができない。

御幸橋の向こうは焼けたが家は焼けなかった。二階の物干し台に干してあった布団の紺色の部分が焦げて綿が飛び出していた。

母に代わって建物疎開に出た隣の奥さんは大火傷で帰ってきた。お乳がはって赤ちゃんに飲んでもらおうとしても、火傷で顔がわからなくなっていて赤ちゃんが顔を見ると泣いてお乳を飲んでくれない。赤ちゃんに顔を見られないように顔をそむけながらお乳を上げる姿を見て、母は申し訳ないと死ぬまで悔やんでいた。

9日に市内を通り己斐にいた妹を迎えに行った。市内には首が飛び、腕が飛び、内臓が飛び出した遺体が転がっていた。電車のつり革につかまったまま亡くなっている人もいる。市内を通ったので私は二次被爆もしている。

軍の治療は偉い人から生きられる者だけを助けるというものだった。15日の玉音放送とき私は隊長の治療をしていた。包帯が膿でとれず交換するのが大変だった。ガバガバと肉まではがれた。

5. いま、被爆者として、アメリカ政府や日本政府にこれだけは訴えたいこと、求めたいと思うことはどんなことですか？

●アメリカ政府に対して

アメリカはロボット技術を使ったロボット戦争を考えているようだが、もっとほかにやることがあるのではないか。核廃棄物をどうするか考えてほしい。

●日本政府に対して

被爆者だけではなく東京大空襲などの一般空襲の被害者、沖縄戦の非戦闘員の被害も補償してほしい。

6. いま、被爆者として訴えたいこと、世界と次世代の人々にこれだけは伝えておきたいことをお聞かせください。

平和記念館の人形について、「怖くてとても見ていられない。あんな人形はどけてしまえ」という声がネットにある。でも、それを知ってもらわなくてはならない。軍も警察もみんななくなり、だれが指揮しているのかわからない。原爆とはそういうものだ。幼い子どももみんな犠牲になるのが戦争。それを伝えていかなくてはならない。

後輩が広島城にあった司令部の通信壕に動員されていた。三交代で勤務していたが8時15分はちょうど勤務交代の時間で壕の中にいた7人だけが助かった。その人たちが25年経ったときに書いた手記が残っている。

今年、広島にお参りに行く準備をしている。会いたいとは思いますがみんな高齢で会うことができるかわからない。ひとりひとり違った被爆体験がある。私の体験だけではなく、他の人の体験も聞き、読んでもらいたい。(2013年8月6日、今年も皆に会うことが叶った。)

原発で原爆の材料になるプルトニウムがたくさん生産されている。北朝鮮よりも日本は材料もあり技術もある。日本はすぐに核兵器を作ることができると外国は思っている。

ウラン、プルトニウムのことを知って、これから先のためにどうしたらいいか考えてほしい。

命の大切さ、生きる大切さを伝えたい。

*時間が45分と短かったため、「その後の人生」、そして「今願うこと」についてはお聞きする時間がありませんでした。疎開先の宮城でのお父さんの原爆症発症と死、原爆症が隠されたこと＝伝染病＝村八分の生活、服部さんの被爆体験、戦後史＝原爆とのたたかいはまだまだ続きます。

そして服部さんの戦後史の途中からは今を生きている私たちの同時代史でもあります。

ぜひ、別の機会をつくり、できたら今回服部さんのお話を聞いた方を中心に、その後の服部さんの歩みを聞く機会を持っていただければと思います。(記録担当 島村)

<返送先> 〒102-0085 東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会 電話/FAX03-5216-7757